

# 医療的ケア児への 安全な在宅移行支援

「小児在宅移行支援指導者育成研修」  
修了者の活動レポート

最終回

## 名古屋第一赤十字病院 (愛知県名古屋市)

愛知県に7施設ある総合周産期母子医療センターは、人口232万人の名古屋市に4施設がある。その中のひとつである名古屋第一赤十字病院は、院内助産を行う「バースセンター」を開設するなど、多様なニーズに答えている。

### 訪問実習で気付く、先を見据えた支援

日本看護協会が行った「小児在宅移行支援指導者育成研修」には、同院から2017年度に2人、18年度に1人が受講した。ことし3月までNICU師長を務め、今は小児科病棟師長の平岩美緒さん（新生児集中ケア認定看護師）は、以前から本会の周産期関連の会議などに参加し、国の動向を見据えた本会が発信する情報を得ていた。そこで同研修が行われると聞き、まずはGCUのスタッフを派遣。2年目は指導者を育成する立場にある小児看護専門看護師・NICU係長の加藤美也子さんを派遣した。

研修では同行訪問の実習があるが、加藤さんは、2日間で4事例（そのうち2事例は同院NICUを退院した児）を経験した。退院後の生活を目の当たりにし、「保育園への通園を目標にされているなど、退院時には想像もつかないほど変化していました。私たちは退院後の生活

を常に考え支援を行っています。もっと先のことを考えて支援することが大切だと感じました」と気付きを語る。

### 切れ目のない支援を目指して

本会の「NICU / GCUにおける小児在宅移行支援パス」は、急性期・回復期・安定期・退院後の在宅不安定期と、児と家族の状態を期で分け、関係職種の役割などを示している。そのパスを同院に合わせて改変し導入したが、スタッフの受け入れはスムーズだったと振り返る。というのも、同院はNICUとGCUを患児の状態に合わせたグループに分けていたからだ。GCUは、医療的ケア児、社会支援を必要とする対象をチーム分けしているため、まずはパスの安定期部分から導入した。パスを運用する中で、さらにNICUに入院する直後からパスを使用する必要性を感じ、急性期部分を追加したパスを18年4月ごろから運用した。

以前は入院時から退院までの全体を示したパスはなく、退院準備のためのチェックリストだった。このパスを導入したことで、各期に各職種が何を実施するかという役割が明確になったと反響があった。経験の浅いスタッフでも先のケアまで見通すことができ、連続した支援につなげることができたという。パスを運用し13人の児が退院した。

同院は病院全体で退院支援に取り組む風土があるが、NICU / GCU専従の退院支援看護師と社会福祉を配置している。平岩師長が入退院支援加算3の導入前から、NICU専従退院支援看護師の配置を要望し実現した。元NICU所属だった看護師の鍋嶋智加さんは、部署異動後



左から鍋嶋さん、現NICU師長の齋藤美由紀さん、平岩さん、加藤さん

も退院支援看護師として毎日NICUで業務を行っている。「全ての児に入院時から関わり、退院を見据えた計画の立案を行っています。地域との連携はMSWと共に進めています」という。定期開催の退院支援カンファレンスとは別に、医師、看護師、臨床心理士、薬剤師などの多職種で患者カンファレンスを頻回に行い、情報共有・連携を図っている。

最後に、パスの名称について「“NICU / GCU”と書かれていると他部署との情報共有のしにくさがあります。名称を変更して産科や小児科病棟も共同で使えると良いのでしょうか」と平岩さんが提案してくれた。入院する前から児が退院するまで、切れ目なく地域へつなぐ。それが、同院の目指す退院支援だ。

【病床数】病院全体33科852床、MFICU9床、NICU18床、GCU30床。【看護職員数】看護師986人（NICU34人、GCU30人）【平均在院日数】NICU23.7日、GCU15.5日【年間入院児数】NICU225人（延べ6,480人）、GCU633人（延べ8,953人）

【参考】「NICU / GCUにおける小児在宅移行支援パスと教育プログラム 2019年度版」  
[https://www.nurse.or.jp/nursing/josan/care\\_support/](https://www.nurse.or.jp/nursing/josan/care_support/)